

他者の発言は共食者のおいしさと電気味覚閾値に影響するか？

坂内元気、土田詩帆、浅田桃子、佐藤直人
鈴木香澄、澁谷颯一、稲葉洋美
新潟医療福祉大学 健康栄養学科

【背景・目的】摂食行動は他者の存在の有無により影響を受ける。共食には摂食量の増加（社会的促進）¹⁾、会話の増加、不定愁訴の軽減など多数のメリットが報告されている²⁾。本研究では、他者の発言が共食者の主観的な「おいしさ」および電気味覚閾値に与える影響を検討することとした。加えて、他者の発言が「おいしさ」に影響を与える場合、被験者の共感性と他者の発言が「おいしさ」に与える影響についても検討した。

【方法】被験者は18～19歳の健常な女子大学生12名とした。バイアスがかからないように被験者には研究の主旨を伝えずに、「嗜好調査」として行った。実験条件は、他者と無言(条件 a)・他者が「おいしい」というポジティブ発言をする(条件 b)・他者が「おいしくない」というネガティブ発言をする(条件 c)³⁾条件を設定した。評価食品は食パン1/2枚を用い、摂食前後に電気味覚閾値を測定した。電気味覚閾値の測定時には、視覚情報を排除するために被験者にアイマスクを着用させた。評価食品に対する嗜好調査項目は、「おいしさ」「味の濃さ」「食感の良さ」「好み」「摂食欲」の5項目とし、嗜好調査には Visual Analog Scale (VAS) を用いた。被験者の共感性については、多次元共感測定尺度 (Davis らの和訳版³⁾) を用いて、「視点取得尺度」「空想尺度」「共感的配慮尺度」「個人的苦悩尺度」の4つの共感尺度を測定した。

【結果】他者の発言は、VAS 法による「おいしさ」の評定に明らかな影響を与えた (図1)。条件 c の評定 (60.1 ± 6.0) は、条件 a (77.8 ± 5.2) および条件 b (82.8 ± 4.1) の評定より有意に低かった (それぞれ $p < 0.005$, $p < 0.005$, 図.1)。また、「好み」に関しても条件 c (60.7 ± 6.3) は、条件 a (76.1 ± 5.4) および条件 b (83.0 ± 4.5) より有意に低かった (それぞれ $p < 0.001$, $p < 0.001$)。しかし、他者の発言は、電気味覚閾値に影響を与えなかった ($p > 0.05$)。「おいしさ」の評定と4つの多次元共感尺度間には明らかな関係は認められなかった ($p > 0.05$)。

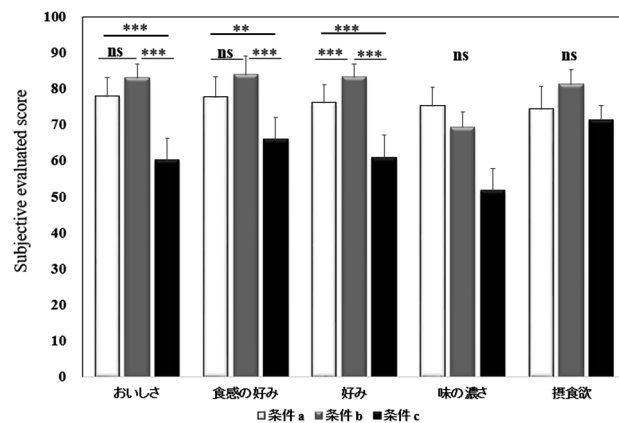


図1. 各条件の主観的評価

** : $p < 0.01$, *** : $p < 0.001$, ns : not significant, n = 12

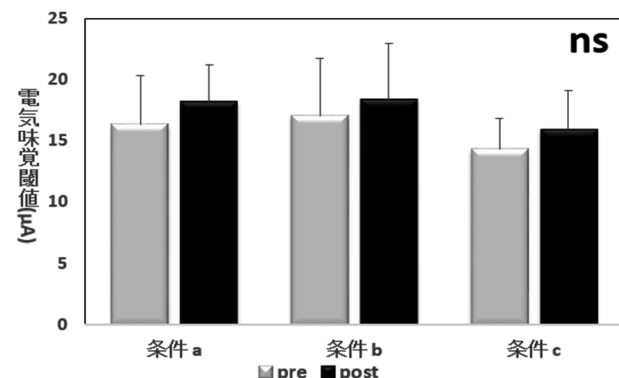


図2. 各条件の電気味覚閾値

ns : not significant, n = 12

【考察】他者の発言は共食者の「おいしさ」「食感」および「好み」といった情動評定に有意に影響を与えたが (図1)、電気味覚閾値には影響を与えなかった。このことより、他者の発言は、生体よりも情動への影響が強いことが推察された。

共感的配慮尺度が高い人は、共食者の発言に影響を受けやすく、「おいしさ」評定が条件により異なるであろうと仮説を立てたが、本実験では共感的配慮尺度と主観的な「おいしさ」の間には有意な関係が認められなかった。本研究より共食者が「おいしくない」と言いながら食べるより「おいしい」と言いながら食べることで、よりおいしく感じる事が推察された。しかし、共食者の発言によりおいしく感じるか否かは、その個人の共感性とは関係がないことが推察された。

【結論】他者の発言は電気味覚閾値には影響を与えなかったが、「おいしさ」には影響を与えた。しかし、「おいしさ」の変化と共感性は関係しないことが分かった。

【参考文献】

- 1) Ellisle : Am J Clin Nutr, 74 : 197-200, 2001.
- 2) Herman : Appetite, 86 : 61-73, 2015.
- 3) Davis : J. Personality and Social Psychology, 44 : 113-126, 1983.